

平成23年度 栃木県 免許状更新講習

2011・7・27
呑竜幼稚園 園長 小林研介

第1講義 保育者も「なでしこ」なのだ！

いつも思うのだが、幼稚園の先生の試合ってなんだろう？

「なでしこ」の活躍の元はどこにあるのか。

多くのスポーツ選手は試合で自分の弱点を見出し、トレーニングし克服している。

そして試合で試す。その結果を受けてさらに足りない面をトレーニングする

だとすると子どもの前に立ってする保育という営みは試合なのか。

保育のプランを立て、実行する。それを記録し、反省・評価し、指導計画の改善・技術の改善をする。(PDCA サイクル)

そのことをしているならば、あなたは まさに試合をしていると言ってもよいだろう。

「試合などという、勝ち負けの考え方は保育にはなじまないのでは」そう言う人は、自分のフィールド（保育室）の中、自分で出来る範囲内で満足するか、怖くて戦えない人 他者の批評を受け入れない人であることが多いようだ。

私達、保育者が試合に臨むために すること

- 幼児理解のために私は何をしているのか 幼児理解
- 幼児の活動の活性化をはかるために私は何を用意しているのか 環境の構成
- 教材研究のために私は何を日夜しているか 教材研究
- 保育技術の向上のため私は何をしているか 技術向上

そういう、意識の持ち方を「試合をしている」と言っている。

そのことを常に考える態度を「試合に向かう」と言う。

そしてもうひとつ、大事なことを問いたい。目標は適切かということ

あなたは幼児に育てるべき内容の俯瞰図を持っているか

子どもの何を育てようとしているのか。そのことを自分に約束しているのか。

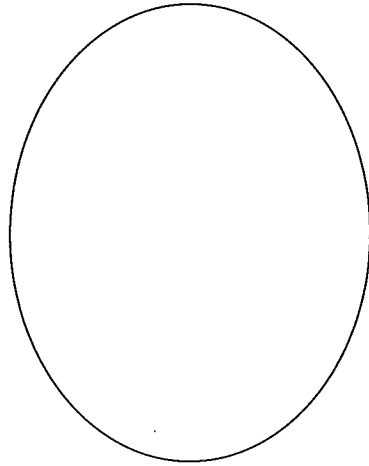
親に、社会に、そして子ども達に約束しているのか。結果を出そうとしているのか。

時には楽しき保育の現場を離れ、自分の立つ位置を確認することを課しているのか。

大海原の羅針盤をなくす怖さを知っているのか。

第2講義 領域の考え方

領域とは何か？



活動の中で子どもに育つものを見極める力
(幼児の活動と内容の関係)

意図のある保育を行うということ

第3講義 用語の整理

自由保育 VS 一斉保育

自由保育 VS 設定保育

園生活の構造

園の生活はおおよそ3つに分けられます。

I 子どもが自分で選んでする（見つける）活動（遊び）

今日は〇〇ちゃんたちとサッカーをしたい！

昨日の続きの基地ごっこがしたいな。

絵本室に行ってみよう。

II 先生の投げかけでする活動（遊び）

お父さんの日にプレゼントをつくったら喜ぶかしら。

いちご摘みに行こうか。

発表会でしてみたいことは何かな？

III 生活に必要な活動（仕事）

着替え、手洗い、片付け、係り（動物の世話）

これらが幼稚園の生活の中に程よく混じっている事が大切だと思います。

Iの自分で選ぶ活動は重要です。

主体性（自分の考え）を育てるためにはなくてはなりません。

そのためには遊びの環境（場所、素材、友達など）が豊かでなくてはならないでしょう。環境をさりげなく（隠し味のように）を整えるのが先生の大事な仕事です。

IIの先生が投げかけの活動も重要です。

先生がすることを決めていて、子どもがそれを受けてする形は多くの習い事の先生（塾、〇〇教室）がとるものです。知識・技術の獲得の為には効果的だと思います。

ただし幼稚園では先生が投げかけるといっても、こどもの興味や関心に基づき行いますので、子どもは無理やりさせられるという感じはありません。その意味でも自由感が大切にされながら投げかけがされるところが幼稚園の特徴です。

3年間の園生活の中で子ども達に経験させたい事を先生（園）は持っています。

幼稚園ではそれらのことをいろいろな場面で繰り返し行うようにする教育の計画を採ります。

IIIは生活力の分野です。幼児といえども現実生活を気にしながら、たくましく生きていけるようにしなくてはなりません。頭でっかちの子どもでいいはずはありません。

知的教育

朝永博士というノーベル賞を採った方のお孫さんがある風の強い日にこう言ったそうです。「おじいちゃん木が揺れて風をおこしているよ。」朝永博士はさすが私の孫「知的だ！」と喜んだそうな。うちわで扇ぐと風がおこる。それを知っている孫は外の風は何がおこしているのかと考え、木の揺れる姿を見て、木が風をおこしていると推論した。と言うわけです。大人なら誰しもそれは事実出ないことはわかります。しかし自分の体験から得られたことを総動員して新たな事を導き出す。そこがノーベル賞博士に「知的」だと言わせしめたことではないでしょうか。知的とはいろいろな定義が出来ますが、「ものの関係を知る」ことと考えます。

- 動物は水とえさをあげないと死んでしまう こと。
- 夏に帽子をかぶらないと頭がとっても 熱くなる こと。
- 頭が熱くなると 体に良くない こと。
- おはようというと おはようと返ってくる こと。
- 25人いるゆり組の椅子は5個ずつ重ねると5つグループになる こと。
- ひとつの音には ひとつの字がある こと。
- 寒い日には氷がはる こと。
- 裏の畑のやわらかい土の下には霜柱ができる こと。

こうしたことが 幼稚園の生活・遊びの中にたくさんあります。

そして子どもたちは 物と物との間にある関係、事象と事象の間にある関係をいろいろな感覚器官を総動員して体験的に受け止め、そこに ある法則性を導き出していくのです。

「なるほど」という体験。「不思議だな」という体験。

そうした豊かな体験が幼児時代にたくさんあることが大切であるわけです。

そしてそばにいる大人がそのことの重要性に気付き付き合っあげること（時には知識を与えることもします）がほんとうの「知的教育」であると思います。

今、早いうちからカードやビデオで文字や数字を覚えさせるのが 「知的教育」 であるとする風潮がありますがそれは「知識教育」であるかもしれない（知識教育を否定するものではない）朝永博士なら なんて言うのでしょうか。